

再びアメリカという国について

9.11から20年ということ、さまざまなニュースが流れました。まだみなさんが生まれる前の2001年に、ニューヨークに峻立するツインタワーの世界貿易センタービルや、首都ワシントンの近くにあるアメリカ国防総省（ペンタゴン）が、イスラム系組織の複数の人間にハイジャックされた飛行機で、自爆テロ攻撃にあう事件が発生しました。

ジェット機が超高層ビルに激突してビルが崩れる映像は、一見現実のものとは思えませんが、ビル周辺の混乱した様子や犠牲者の映像が流されるようになると、とてつもなく悲惨な出来事が起きていることが実感されました。

テロの実行犯は、イスラム原理主義組織アルカイダのメンバーと断定され、首謀者のアルカイダのリーダーであるウサーマ・ビン・ラディンが潜伏するとされたアフガニスタンにアメリカが軍隊を送ると、当時のタリバン政権は崩壊して、その勢力は地方に分散しました。また、2003年にアメリカは、大量破壊兵器を保持しているとして、サダム・フセイン大統領が統治していたイラクにも軍事侵攻しました。

10年後（！）の2011年に、ビン・ラディンはアフガニスタンの隣国パキスタンで、アメリカ軍により殺害されました。この間のアフガニスタンやイラクでの戦闘にはたくさんのアメリカの若者が従軍し、死傷しました。そして、その死者以上に、帰国後に戦闘でのPTSD（心的外傷後ストレス障害）で自殺したり、日常生活が十分に送れなくなった人がいるといわれています。

さて、この9.11の出来事のあと、何度もアメリカ市民が歌う様子が流れた曲が、「God Bless America」でした。これはアメリカの国歌ではなく、20世紀につくられた愛国歌のようなものです。歌詞はこんな感じです。テロで傷ついた国民を励まし奮い立たせるような内容ですね。動画配信サイトで簡単に聞くことができます。

God bless America,
Land that I love,
Stand beside her, and guide her,
Through the night with a light from above.
From the mountains,
To the prairies to the oceans,
White with foam
God bless America, My home sweet home
God bless America, My home sweet home.

9.11に関するニュースや昔の映像を見ながら、かつてこの歌をある映画の中で聞いたことを思い出しました。その映画は、「ディア・ハンター」という映画で、ロバート・デ・ニーロが主演する、ベトナム戦争に従軍したアメリカの若者たちを主人公とした映画です。

ペンシルベニア州（アメリカの石炭産地の一つです）の製鉄所で働き、週末には鹿狩りを楽しむ若者たちが、ベトナム戦争に徴兵され、現地でベトナム軍の捕虜になったものの命からがら脱出します。しかし、その後行方不明になった仲間の一人が「ロシアン・ルーレット」（拳銃に一発だけ弾を詰めて、交互に引き金を引き合い、どちらが生き残るか周りの人が賭けるという賭博）のプレーヤーになってベトナムに残っていたのを、一度アメリカに戻った仲間が助けに行くという映画です。

アメリカという国については、以前「校長室より 30」で書きましたので、そちらも参考にしてほしいのですが、さまざまな民族の集まりで構成されるこの国で、ロシア系の移民というものは少数派です。主人公たちはそのロシア系移民の子孫で、映画の前半で展開されるロシア風の結婚式の様子や、当時はまだ無名でしたがその後大女優となるメルル・ストリープが、ものすごい存在感で出てくるシーンは今も記憶に残っています。

その映画のラストシーン、心や身体にさまざまな傷を負った若者たちが集まり、ロシアン・ルーレットで亡くなった仲間を悼むシーンで、静かに合唱されるのが「God Bless America」でした。ベトナム戦争によるアメリカ軍兵士の死者は、アフガニスタンのそれに比べたら桁違いに多く、身体的障害やPTSDに苦しむ人の数も比べものになりませんでした。そんな中で、静かにこの歌が流れるシーンは、アイロニー（皮肉）などという言葉が薄っぺらく思えるような強烈なものでした。

さて、アフガニスタンでは、一度はアメリカ軍の侵攻で崩壊したタリバン政権が、再び勢力を盛り返し、今年8月に首都カブールに侵攻して、政権を奪取しましたね。イスラム原理主義は、現在世界で支配的となっている価値観とは異なる部分がかかなりあり、特に両性の平等に関するところがいろいろとニュースになっています。

このことについては、また別に書くことにしますが、現在のアメリカが再びアフガニスタンの政治に軍事介入しないのは、ベトナム戦争の轍（てつ）を踏むのを避けているからだと思えます。ベトナム戦争に莫大な国費つぎこんだ結果、アメリカは世界の基軸通貨であったドル中心の国際通貨体制（ブレトンウッズ体制）を維持できなくなり、現在のように世界各国の通貨の為替相場が、その時々々の景気動向等によって変動するしくみ（変動相場制）に移行する、いわゆるニクソン・ショック（1971年）という事態をもたらしました。支持率の低下や様々な批判を浴びながらも、バイデン大統領は「国益を守る」として、アフガニスタン情勢を静観しています。

「校長室より 38」で書いたように東西冷戦のヤルタ体制が終わったとはいえ、大国の動向や宗教的な価値観をめぐる対立など、まだまだ世界に紛争の種は尽きません。

しばらく分散登校期間が続きますので、特に3年生に向けて、大学受験等で出題されそうな内容を中心に、「校長室より」を発行します。